2022(令和４)年度　学校推薦型選抜　基礎学力検査

法学部　小論文

【注　意】

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 試験時間は9時30分から11時00分まで(90分間)です。
3. この問題冊子は表紙以外に7ページあり、解答用紙は1枚、下書き用紙は1枚あります。
4. 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせてください。
5. 解答はすべて解答用紙の解答欄に記入してください。
6. 解答用紙の氏名欄を除き、受験者本人の特定につながるような氏名、住所、学校名等は記述しないでください。
7. 解答用紙を持ち出してはいけません。持ち出した場合、試験をすべて無効とします。
8. 試験終了後、問題冊子および下書き用紙は持ち帰ってください。

問　以下の課題文を読み、問題１と問題２に答えなさい。

温暖化対策として、あなたは、なにかしているだろうか。レジ袋削減のために、エコバッグを買った？　ペットボトル入り飲料を買わないようにマイボトルを持ち歩いている？　車をハイブリッドカーにした？

はっきり言おう。その善意だけなら無意味に終わる。それどころか、その善意は有害でさえある。

なぜだろうか。温暖化対策をしていると思い込むことで、真に必要とされているもっと大胆なアクションを起こさなくなってしまうからだ。良心の呵責（かしゃく）から逃れ、現実の危機から目を背けることを許す「免罪符」として機能する消費行動は、資本の側が環境配慮を装って私たちを欺くグリーン・ウォッシュ（注）にいとも簡単に取り込まれてしまう。

では、国連が掲げ、各国政府も大企業も推進する「ＳＤＧｓ（持続可能な開発目標）」なら地球全体の環境を変えていくことができるだろうか。いや、それもやはりうまくいかない。政府や企業がＳＤＧｓの行動指針をいくつかなぞったところで、気候変動は止められないのだ。ＳＤＧｓはアリバイ作りのようなものであり、目下の危機から目を背けさせる効果しかない。

直視しなくてはならない現実は、私たち人間が地球のあり方を取り返しのつかないほど大きく変えてしまっているということだ。

人類の経済活動が地球に与えた影響があまりに大きいため、ノーベル化学賞受賞者のパウル・クルッツェンは、地質学的に見て、地球は新たな年代に突入したと言い、それを「人新世（ひとしんせい）」と名付けた。人間たちの活動の痕跡が、地球の表面を覆いつくした年代という意味である。

「人新世」の資本主義と環境危機の関係を分析するにあたって、まずは、グローバル・サウスに目を向けてみよう。グローバル・サウスとは、グローバル化によって被害を受ける領域ならびにその住民を指す。グローバル・サウスの抱える問題は、以前なら「南北問題」と呼ばれていた事態だ。ただ、新興国の台頭や、先進国への移民増大によって、「南北」格差は地理的位置との関係が必然ではなくなりつつある。そのため、ここでは、グローバル・サウスという言葉を使いたい。

ともかく、旧来の南北問題も含め、資本主義の歴史を振り返れば、先進国における豊かな生活の裏側では、さまざまな悲劇が繰り返されてきた。いわば、資本主義の矛盾がグローバル・サウスに凝縮されているのである。

近年の大きな事件に絞ってみても、イギリスのＢＰ社が引き起こしたメキシコ湾原油流出事故、多国籍アグリビジネスが乱開発を進めるアマゾン熱帯雨林での火災、商船三井が運航する貨物船のモーリシャス沖重油流出事故など枚挙にいとまがない。

これらの事故は単なる「不運な」出来事なのだろうか。いや、そうではない。事故が起こる危険性は、専門家や労働者、住民たちによって繰り返し指摘されてきた。それにもかかわらず、国や企業はコストカットを優先して、有効な対策を取らず放置してきたのである。これらは、起こるべくして起きた「人災」なのだ。

そうはいっても、遠く離れたメキシコやブラジルで起きた事故など、日本人の関心は及ばないかもしれない。自分にはまったく関係ないと思う者もいるだろう。だが、この「人災」に、私たち日本人も、間違いなく加担してきた。

自動車の鉄、ガソリン、洋服の綿花、牛丼の牛肉にしても、その「遠い」ところから日本に届く。グローバル・サウスからの労働力の搾取と自然資源の収奪なしに、私たちの豊かな生活は不可能だからである。

ドイツの社会学者ウルリッヒ・ブラントとマルクス・ヴィッセンは、グローバル・サウスからの資源やエネルギーの収奪に基づいた先進国のライフスタイルを「帝国的生活様式」と呼んでいる。

帝国的生活様式とは要するに、グローバル・ノースにおける大量生産・大量消費型の社会のことだ。それは先進国に暮らす私たちにとっては、豊かな生活を実現してくれる。その結果、帝国的生活様式は望ましく、魅力的なものとして受け入れられている。だが、その裏では、グローバル・サウスの地域や社会集団から収奪し、さらには私たちの豊かな生活の代償を押しつける構造が存在するのである。

問題は、このような収奪や代償の転嫁なしには、帝国的生活様式は維持できないということだ。グローバル・サウスの人々の生活条件の悪化は、資本主義の前提条件であり、南北の支配従属関係は、例外的事態ではなく、平常運転なのである。

もちろん、このような耳の痛い指摘は、これまでも何度もなされてきた。けれども、私たちは、いくばくかのお金を寄付するくらいで、すぐにまた忘れてしまう。すぐに

忘れることができるのは、これらの出来事が、日常においては不可視化されているからである。

ミュンヘン大学の社会学者シュテファン・レーセニッヒは、このようにして、代償を遠くに転嫁して、不可視化してしまうことが、先進国社会の「豊かさ」には不可欠だと指摘する。これを「外部化社会」と彼は呼び、批判するのだ。

先進国は、グローバル・サウスを犠牲にして、「豊かな」生活を享受している。そして、「今日だけでなく、明日も、未来も」この特権的な地位を維持しようとしているとレーセニッヒは断罪する。「外部化社会」は、絶えず外部性を作り出し、そこにさまざまな負担を転嫁してきた。私たちの社会は、そうすることでのみ、繁栄してきたのである。

こうして帝国的生活様式は、日常の私たちの生活を通じて絶えず再生産される。一方で、その暴力性は遠くの地で発揮されているため、不可視化され続けてきた。

環境危機という言葉を知って、私たちが免罪符的に行うことは、エコバッグを「買う」ことだろう。だが、そのエコバッグすらも、新しいデザインのものが次々と発売される。宣伝に刺激され、また次のものを買ってしまう。そして、免罪符がもたらす満足感のせいで、そのエコバッグが作られる際の遠くの地での人間や自然への暴力には、ますます無関心になる。資本が謀(たばか)るグリーン・ウォッシュに取り込まれるとはそういうことだ。

先進国の人々は単に「転嫁」に対する「無知」を強制されるだけではない。自らの生活をより豊かにしてくれる、帝国的生活様式を望ましいものとして積極的に内面化するようになっていくのである。人々は無知の状態を欲望するようになり、真実を直視することを恐れる。「知らない」から「知りたくない」に変わっていくのだ。

しかし、自分たちがうまくいっているのは、誰かがうまくいっていないからだと私たちは暗に気がついているのではないか。

現代ドイツを代表する哲学者マルクス・ガブリエルが述べているように、その不公正を「自分たちに関係のないことだと、(中略) 見ないようにしてしまう」だけなのだ。直視することに耐えられない、だから「私たちがその不公正を引き起こしている原因だと知っていながら、現在の秩序の維持を暗に欲している」。

こうして、帝国的生活様式は一層強固なものとなり、危機対応は未来へと先延ばし

にされていく。それによって、私たち一人ひとりが、この不公正に加担することになる。だが、その報いがついに気候危機として中核部にも忍びよってきている。

もちろん、こうした指摘自体はそれほど新しいものではない。公害問題や南北問題が盛んに議論された1970〜80年代にはすでに、似たような議論が展開されてきた。

その一例が「オランダの誤謬（ごびゅう）」である。

オランダのような先進国の生活は、地球に大きな負荷をかけている。それにもかかわらず、これらの国での大気汚染や水質汚染の程度は比較的低い。汚染度の低い先進国とは対照的に、途上国では、大気汚染、水質汚染、ごみ処理問題など、さまざまな環境問題に苦しんでいる。人々は慎（つつ）ましやかな生活をしているにもかかわらずだ。

なぜ、そんな一見すると矛盾した事態が生じるのか。ひとつの説明方法は、技術進歩の成果を理由に挙げるものだ。経済成長がもたらした技術進歩によって、公害を引き起こしてきた汚染物質の削減や除去が可能になったというのである。

だが、環境汚染を軽減しながら、経済成長を果たしたことを先進国が寿（ことほ）ぐことこそ、まさに「誤謬」である。先進国の環境改善は、単に技術発展によるものだけではなく、資源採掘やごみ処理など経済発展に付きまとう否定的影響の少なからぬ部分を、グローバル・サウスという外部に押しつけてきた結果にすぎないからだ。

この国際的な転嫁を無視して、先進国が経済成長と技術開発によって環境問題を解決したと思い込んでしまうのが、「オランダの誤謬」である。

しかし、人類の経済活動が全地球を覆ってしまった「人新世」とは、そのような収奪と転嫁を行うための外部が消尽した時代だといってもいい。

資本は石油、土壌養分、レアメタルなど、むしり取れるものは何でもむしり取ってきた。この「採取主義」は地球に甚大な負荷をかけている。ところが、資本が利潤を得るための「安価な労働力」のフロンティアが消滅したように、採取と転嫁を行うための「安価な自然」という外部もついになくなりつつあるのだ。

資本主義がどれだけうまく回っているように見えても、究極的には、地球は有限である。外部化の余地がなくなった結果、採取主義の拡張がもたらす否定的帰結は、ついに先進国へと回帰するようになる。

ここには、資本の力では克服できない限界が存在する。資本は無限の価値増殖を目指すが、地球は有限である。外部を使いつくすと、今までのやり方はうまくいかなく

なる。危機が始まるのだ。これが「人新世」の危機の本質である。

その最たる例こそ、今まさに進行している気候変動だろう。外部の消尽が行き着くところまできた今、日本のスーパー台風やオーストラリアの山火事など、その被害が先進国でも可視化されるようになっているのである。

気候変動対策の時間切れが迫るなか、果たして私たちはなにをなすべきなのか。

経済学者ケネス・E・ボールディングはかつて「指数関数的な成長が、有限な世界において永遠に続くと信じているのは、正気を失っている人か、経済学者か、どちらかだ」と述べたとされる。それから半世紀以上がたち、環境危機がこれほど深刻化しても、まだ私たちはひたすら経済成長を追い求め、地球を破壊している。経済学者的な思考は、それほど深く、日常に根づいてしまっているのだ。私たちは「正気を失っている」のかもしれない。

だが、子どもたちは、理性を保っていた。大人たちの気候変動対策の偽善を抉(えぐ)り出したのが、スウェーデン人の環境活動家グレタ・トゥーンベリである。学校ストライキで有名になった当時15歳の高校生は、政治家たちが人気取りのために「環境に優しい恒久的な経済成長のことしか語らない」ことを厳しく批判したのだ。2018年のＣＯＰ24（国連気候変動枠組条約締約国会議）での出来事である。

グレタの主張は、資本主義が経済成長を優先する限りは、気候変動を解決できないというものである。たしかに、そう考えたくなる気持ちもわかる。実際、資本主義は、冷戦体制崩壊後のグローバル化と金融市場の規制緩和で生じた金儲(かねもう)けのチャンスを追いかけることに夢中で、気候変動対策のための貴重な 30 年間を無駄にしてきたのだ。

歴史を振り返れば、当時ＮＡＳＡ（米航空宇宙局）の研究者であったジェームズ・ハンセンが「99％の確率で」気候変動が人為的に引き起こされていると米議会で警告したのは、1988年のことだった。さらに、同年にはＩＰＣＣ（気候変動に関する政府間パネル）が、ＵＮＥＰ（国連環境計画）とWMO（世界気象機関）によって設立された。

ここには、気候変動対策の国際協定締結に向けた希望があった。そして、もしそのころから対策を始めていれば、二酸化炭素の排出量を年３％くらいのペースでゆっくり減らしていく形で、気候変動問題は、十分解決可能だっただろう。

ところが、ハンセンの警告はタイミングがまずかった。直後にベルリンの壁が崩壊し、さらにはソ連が崩壊したことで、アメリカ型の新自由主義が世界を覆うことになったのである。旧共産圏に廉価な労働力や市場を見出(みいだ)した資本主義は新たなフロンティアを切り拓(ひら)いていったのだ。

だが、経済活動がますます拡大することで、資源の浪費は加速していった。例えば、人類が使用した化石燃料のなんと約半分が、冷戦が終結した 1989 年以降のものなのである。こうして、気候変動対策のための、貴重な 30 年あまりの歳月が浪費され、状況は著しく悪化してしまった。

だから、グレタがあれほど激しく批判するのは、目先のことだけを考えて、貴重なチャンスを無駄にした大人たちの無責任さに対する怒りからである。そして、それでも依然として、経済成長を優先しようとする政治家やエリートの態度が、彼女の怒りの火に油を注ぐのだ。「あなたたちが科学に耳を傾けないのは、これまでの暮らし方を続けられる解決策しか興味がないからです。そんな答えはもうありません。あなたたち大人が、まだ間に合うときに行動しなかったからです」。

ここまできたら、今のシステムのうちには解決策がない、だから、「システムそのものを変えるべきだ」と、グレタは、ＣＯＰ24 の演説を締めくくった。世界中の若者たちは、グレタを熱狂的に支持した。

子どもたちの声に応えようとするなら、私たち大人は、まずは現在のシステムの本質を見極め、次なるシステムを準備しなければならない。もちろん、グレタの言う無策のシステムとは、資本主義のことである。

（注）商品やサービスなどが、あたかも環境に配慮しているかのような印象を与えることをいう。主に企業活動に対して使われる。

（斎藤幸平『人新世の「資本論」』による。ただし、出題に際して原文の一部を改めた。）

問題１　筆者の主張を要約しなさい。（330 字以内）（60 点）

問題２　課題文の論旨を踏まえ、気候変動対策の時間切れが迫るなか、経済成長や環

境負荷の問題を考慮して、あるべき「システム」についてのあなたの考えを述べなさい。(500 字以内) (90 点)